陸法言『切韻』研究　要旨

藤田拓海

隋の仁寿元年（601 年）に陸法言が撰述した『切韻』は、唐代に多くの増補本を生み出したが、のちに散逸した。20 世紀になると『切韻』の残巻が次々と発見されていく。そうしたなかで陸法言『切韻』を復元したのが李永富[1973]『切韻輯斠』である。しかし、李永富[1973]が復元した陸法言『切韻』には多くの問題があった。復元に用いたテクストの質・量に不備が多かったこと、復元の方法に適切でない部分があったことなどである。

『切韻』は中国語音韻史を研究するうえでの最重要資料であるが、そればかりでなく中国学・日本語学にも関連が深い。そこで本稿では、李永富[1973]の全面的な検証・修正を行うことで、より精密な陸法言『切韻』のテクストを作成した。

本稿の構成は以下のとおり。

序章

「1　緒言」では、本稿の目的である李永富[1973]修正の意義、そして『切韻』の価値について述べた。「2　陸法言『切韻』」では、陸法言『切韻』編纂のいきさつ、体裁について述べた。「3　切韻系韻書」では、陸法言『切韻』の増訂本である切韻系韻書について概観した。その後に「4　凡例」「5　本稿の構成」を置いた。

第 1 章　『切韻』残巻研究史

「第 1 節」では、切韻残巻が発見された過程や、残巻の名称についての説明を行なった。「第 2 節」では、全 5 期に分け、残巻が学界に紹介されていく過程、残巻研究の流れについてまとめた。「第 3 節」では、残巻を扱う上でのテクストの問題を採り上げた。「第 4 節」では、本稿が依拠する上田正[1973]『切韻残巻諸本補正』の分類ごとの基準、残巻の体裁について解説した。「第 5 節」では、陸法言『切韻』を復元した李永富[1973]、上田正[1975]『切韻諸本反切総覧』の説明を行うとともに問題点を指摘した。

第 2 章　『切韻』各論

「第 1 節」では、上田正[1973]、周祖謨[1983]『唐五代韻書集存』、張涌泉・關長龍[2008]『敦煌經部文獻合集』における分類の相違をまず示した上で、上田正[1973]の分類に従って、各残巻に対する諸氏の見解をまとめた。「第 2 節」では、陸法言『切韻』の復元方法と、その限界について説明した。「第 3 節」では、残巻の分類において問題となる『切韻』の増補と省略について採り上げた。「第 4 節」では、『切韻』の音類が諸本や解釈如何で異なることがあることを示した。

第 3 章　切韻注

四声に基づき全 4 節に分け、李永富[1973]が推定・復元した陸法言『切韻』に問題があると思われるものを取り上げ、修正内容を示した。その結果が付表「切韻表」に示されている。

終章

「1　結語」では、本稿のまとめ、李永富[1973]の修正度を示した。「2　今後の展望」では、残された課題や今後の展望について述べた。

参考文献

参考文献と依拠テクストを掲げた。

付論　「乾（カン）」「乾（ケン）」字考

唐代を中心に、「乾」を「カン」に、「乾」を「ケン」に用いるという区別があったことを述べた小論である。この区別は『切韻』残巻の整理過程で見出したものであり、この小論で『切韻』の用例を多く示しているのはそのためである。本稿が行なった李永富[1973]の修正にも、この小論の成果が反映されている。

付表　「切韻表」

切韻諸本の状況をまとめたものである。この切韻表に基づき、本稿の論述は展開される。

付表　「切韻残巻対照表」

各種残巻の残存状況・著書（論文）収録状況を示した表である。